

profile

せき・かなこ ●1991(平成3)年生まれ、長野県出身。工学部建築学科卒業。大学時代には所属していた研究室で、町おこしなどのプロジェクトに携わり、卒業後は高松建設(株)へ入社。設計本部に所属する一級建築士。



現場へ出向いたり、書類の手続きなどで外出は週3回ほど。デスクワークがメイン。

「先日、小学校の同級生に久しぶりに会ったときに言われたんです。『昔からの夢を叶えたんだね、すごいね!』って。それを聞いて、ああ、自分はそんなに幼い頃から建築士を目指していたのか、と改めて思いました」
何をきっかけに興味を持ったのかなんて、もう思い出せない。でも、小さな頃からずっとずっと、憧れ続けていた。その気持ちだけは確かに感じながら、関は嬉しそうに、建築というものに抱いていた印象について語ってくれる。
「図工の授業で、カレンダーをつくったことがあるんですよ。カレンダーっていうと、普通は平面でしょう? でもクラスで私だけ、立体のカレンダーを提出したんです。褒めてもらえて、誇らしかったのを覚えています。立体のものをつくるのが好きだったんだと思います」
ちょうどその頃は、テレビで建築を扱った情報番組が流行していた時期でもあった。そこで

いつからかわからないくらいずっと想っていた夢

今の仕事が好き! 小さい頃からこの仕事に就きたかった! マウ言える人は、世の中にどれくらいいるのだろうか。関香奈子さんは、そんな昔からの夢を叶えたひとりだ。夢を叶えた今はどんなことを思うのか。建築とともにある彼女の、これまでとこれからを語ってもらう。

やるなら、実務にこだわる

見たのは、建築士が建物の課題を見事に解決する、その姿。テレビを介して、意図せず日常的に建築に触れることとなった関だったが、建築を仕事にすることが、次第にリアルなものになっていったという。

建築士を志した人間が、大学で工学部の建築学科に入学するのは、よくあるルートだ。そしてそのまま大学院へと進み、本格的に実力をつけていくというルートも多くの人を選ぶもの。しかし、建築学科で学位を修めた後、関は進学ではなく、就職することを選んだ。
「学部卒の建築士が少ないということは、聞いていました。でも私は、早く働きたかったんです。実務に就くことが大事だと思っていました。仕事として建築に向き合うことが必要だと考えていたんです」
関のこの考えには、もちろん理由があった。それは、彼女が現在の実際の業務を、「すごく『地味』な仕事」という言葉によく表れている。もちろん、これは決してネガティブな意味ではない。
「学生時代も、様々なプロジェクトに取り組みさせてもらいました。でも、学生ができること、やらせてもらっていたことって、結局『美味しいところ』だけだったんです。考えることも楽しいところだけなのだと思ってきました。その一

輝け! けんせつ小町

意匠設計

関 香奈子

高松建設株式会社
東京本店 設計本部



「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。

my Beginning

私が建設業に入った理由

ずっとずっとなりたかった、建築士



右上、右下／現在担当しているのは、店舗と一体になった住宅。頻繁に足を運んでいる。
上／城ヶ崎部長との打ち合わせ。部内の上司や先輩とは、東京近郊の新しい建築物と一緒に見に行く勉強会を行うこともよくあるという。



my Growing

私が建設業界で学んだこと

自分の思う良い建築を相手に伝えていく



自身が設計を担当した施工中の現場で、岩戸昌浩所長と。細かな事項でも直接話して確認を行う。

方で仕事になると、美味しいところを考えるだけではなく、そのプロジェクトがどうやったら実現できるか、どんな資料を用意すれば自分の想いを伝えることができるのか、施主や協力会社のみなさんとどう連携するのかなど、緻密で細やかな業務の積み重ねが必要です。最初から最後まで、自分でやらなければいけないし、すごく地味な仕事が続きます。でも私は、そこまですべてを建築だと思っていたから、早く「仕事として」建築と向き合いたかったんです」

プラスの価値を生み出す仕事

そこまで彼女を惹きつける、建築の魅力はどこにあるのだろうか。関は、「建築の面白さは、プラスの価値を生み出していく力を持っていることですね」と言う。

たとえば、医師が病気を治療すること。世の中の不便を解消するような、新商品や新サービスが開発されること。これらは端的に言うと、マイナスの状態を解決し、ゼロに近づけていく仕事だ。一方で建築は、そのままにしても困ったり不便だったりするものではないけれど、更に良くしていく、つまり、ゼロをプラスにしていく仕事である。どちらも素晴らしく、求められる仕事であることに変わりはないが、物事の価値を更に高めていく、プラスを生み出す仕事は、関にとって非常に面白みのある仕事なのだという。

「現在、多くの場所で工事が行われている渋谷駅なんて、特にそうですね。新しく道をついたり建物建てたりすることで、街がもっと良くなる、進化する。これからどうなるんだろうとワクワクさせてくれるし、行きたいと感じる街を、建設業がつくってくれているのだと強く感じます」

直属の上司である城ヶ崎健司部長は、「建築士には『仕事が好きタイプ』と『建築が好きタイプ』の二種類がありますが、彼女は完全に後者ですよ」と笑う。その言葉通り、夢を叶え建築士になった後も、彼女はずっと、建築に魅了され続けている。

伝えることのできる建築士になる

今後、関はどんな建築士になっていきたいのか。問いかけると、「バリバリ働き続けたい」のだと答えてくれた。「カッコいい女性でありたいなと思っています。私にとってのカッコいい女性って、やりたいことをやっている人なんです。仕事でも趣味でもいいけど、私は建築が好きなので、バリバリと、この仕事をしていきたいです」

しかし、建築が好きすぎるからなのか、普段の業務では多少、空回りしてしまうこともあるようだ。「上司との打ち合わせや、施主へのプレゼンテーションの場で、伝えたいことがあります」



オフィスには設計部専用のフロアがあり、打ち合わせスペースや資料スペースなどの使いやすいデザインが好評だ。

my style

長かったGWを使って海外旅行に！いつものお休みは短いのでほとんどが国内旅行。しかし今回は海外旅行へ行きました！国内建築を巡るのも楽しいですが、海外建築を見ることができてとても充実した連休を過ごすことができました！写真はバンコクのNaiipa Art Complex (ナイパー・アート・コンプレックス)。木々と建築が一体化した豊かなオフィスビルでした。



カフェスペースもあり、とても居心地がよい空間でした。

ぎて。一気に全部しゃべっちゃって、相手がボカンとしていいことがよくあります。『で、何が言いたいの？』って聞かれます(苦笑)』
 どんなに良いものづくりをしようとしても、関わる人たちにそれが伝わらなければ実現はできない。伝えることは、重要な技術だ。なぜそのデザインが良いのか。どんな根拠で企画しているのか。どこに主眼をおいたプレゼンテーションであればスムーズに理解を得られるのか。
 だからこそ、彼女の掲げる次の目標は、自分の想いや考えをきちんと伝えるスキルを鍛えていくこと。今日も彼女は、大好きな建築について、目の前の相手と真剣に向き合い、その良さを伝え続けていることだろう。

my **Growing** 私が建設業界で学んだこと